開隆堂

教育eye

未来を見据えた最新教育トピック

本資料は「教科書発行者行動規範」に則り、
配布を許可されているものです。

Vol.3
教育情報誌

特集

教育×非認知能力

CONTENTS

クロスアイ
非認知能力の本質と自己理解
荒木 香織
株式会社CORAZON チーフコンサルタント／順天堂大学スポーツ健康科学部客員教授 …… 2

特集
正解のない時代に、学校で「経験」を保障する
今村 久美 認定NPO法人カタリバ 代表理事 …… 4

非認知能力を育む学校づくり
── 三つの力を軸に「生徒が主役」の学校を目指す ──
髙本 裕司 赤磐市立磐梨中学校主幹教諭 …… 6

教育論考
第3回「非認知能力」と「青い鳥」
丹野 哲也
独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 情報・支援部 上席総括研究員 …… 8

cross × eye

非認知能力の本質と自己理解

昨今注目される「非認知能力」ですが、その本質は正しく理解されているでしょうか。スポーツ心理学の専門家の視点から、教育現場における誤解を解き、子どもと教師の未来を拓く「非認知能力」の本質について紐解いていきます。

私は昨今の教育現場で「非認知能力」という言葉が独り歩きしていることに危惧を覚えています。英語の「Non-cognitive skills」がそう訳されたことで、あたかも「認知」が関係ない能力のように誤解されがちですが、本質は異なります。自分自身に良い習慣を身につけ、前向きなマインドセットを育むプロセスは、高度な「認知」そのものです。この言葉の真意は「知能検査（Cognitive test）では測れない、社会性や感情に関するスキル」を指しているのです。

人生の成功において、IQ（知能指数）が寄与する割合はわずか数パーセントという研究もあります。残りの大部分は環境や社会的なスキルなどで、その中には非認知能力も含まれています。トップアスリートの世界においても、スポーツ心理学の重要性は言うまでもありません。高い技術があっても感情を調整できなければ良いパフォーマンスは発揮できません。現在の教育現場では、教科指導という「知能」の向上と、非認知能力という「感情的知能」の育成を、一人の教員が同時に担わされています。動物の飼育と植物の栽培が根本的に異なるように、これらは別個の専門性が必要です。そのために私たちのような専門家がいるのであり、教科指導を本分とする先生方にすべてを期待するのは、制度的な「壁」があると言わざるを得ません。

非認知能力を伸ばすために最も大切なのは、自分自身を正しく「知る」ことです。日本の教育現場では「自分と向き合う」「自分を高める」という表現が好まれますが、これらは「今の自分は不十分だ」という否定的なニュアンスをはらみがちです。心理学的に一番重要なのは、自己理解です。自分が何を好み、何に心地よさを感じるか。その自己理解からしか、非認知能力は始まりません。能力とは、無理に「高める」ものではなく、自身の持ち味を理解した上で、それを最大限に発揮できる選択をすることなのです。

これからの教育に求められるのは、子どもたちが自分を理解しながら、持ち味を活かせる「環境デザイン」です。文部科学省が示す方向性も、本来は物理的・人員的な環境整備を伴うべきものです。特定の道具や設備を揃えるハード面の整備も、立派な環境デザインの一つでしょう。多様な個性が集まる学校という組織において、一人ひとりが自分の持ち味を発揮できる場所を見つけられるよう、リーダーは多角的に環境を整える必要があります。

最後になりますが、先生方ご自身も、まずは「自分を知る」ことを大切にしてください。自分が持っていないものを子どもに教えることは難しいです。先生方がこれまでのキャリアで培ってきた持ち味や経験を、ありのまま共有すること。その誠実な姿勢こそが、子どもたちの非認知能力を呼び覚ます、何よりの教材になるはずです。

荒木香織（あらき かおり）
株式会社CORAZON チーフコンサルタント／順天堂大学スポーツ健康科学部客員教授。スポーツ心理学者、パフォーマンスサイコロジー®コンサルタントとして活動。

Column 持ち味を活かす組織

ラグビーに学ぶ役割の理解と自己受容

ラグビーには、体の大きな選手もいれば、足の速い選手もいます。全員が同じように走る必要はありません。重要なのは、コンタクトが得意な選手が役割を果たし、次に繋げるパスを出すことです。もし「走れないこと」を課題として克服にばかり時間を費やせば、その選手の本来の持ち味は死んでしまいます。私自身、2012年から2015年、そして2024年から現在までラグビー男子日本代表のチーム全体のメンタルコーチを務めてきましたが、強固な組織とは、各々が「自分自身の持ち味と課題」を正しく知り、受け入れ、互いの役割を尊重し合える場所なのです。

2015年ラグビー W杯、宿舎にて。荒木香織メンタルコーチと日本代表。

教育×非認知能力

正解のない時代に、学校で「経験」を保障する

――「自分の意見を持ち」「みんなで合意する」を教育の真ん中に置く

今村 久美（いまむら くみ）

認定NPO法人カタリバ 代表理事

79年生まれ。慶應義塾大学卒。2001年にNPOカタリバを設立し、社会の変化に応じてさまざまな教育活動に取り組む。文部科学省中央教育審議会委員。

■探究の10年、現場から届く「痛切な声」

認定NPO法人カタリバを立ち上げて25年、中央教育審議会の委員として議論に参画するようになってから10年が経ちました。当時30代だった私は、「学校を教員集団のみの閉じられた学びの場にしない」という決意と、「プロジェクト型学習（探究）」の価値を公教育に実装する期待に胸を躍らせていたのを覚えています。

2020年度改訂のキーワードとなった「探究」は、多くの学校に浸透しました。しかし、次期指導要領の検討が始まった今、現場では、当時の理想が十分に実現できているとは言い難い現実に直面しています。ある高校の先生は、自嘲気味にこう語りました。「うちの探究は、教員が用意したタスクを消化し、レポートを書くだけの時間になっている。誰も幸せにしていない」。探究が「タスク化」してしまう背景には、先生方の真面目さがあります。限られた時間で評価可能な成果を出そうとするあまり、「探究」が通常の学びから切り離された〈孤独な作業〉になってしまったのではないでしょうか。

■次期改訂の核心：三つの学びを連動させる

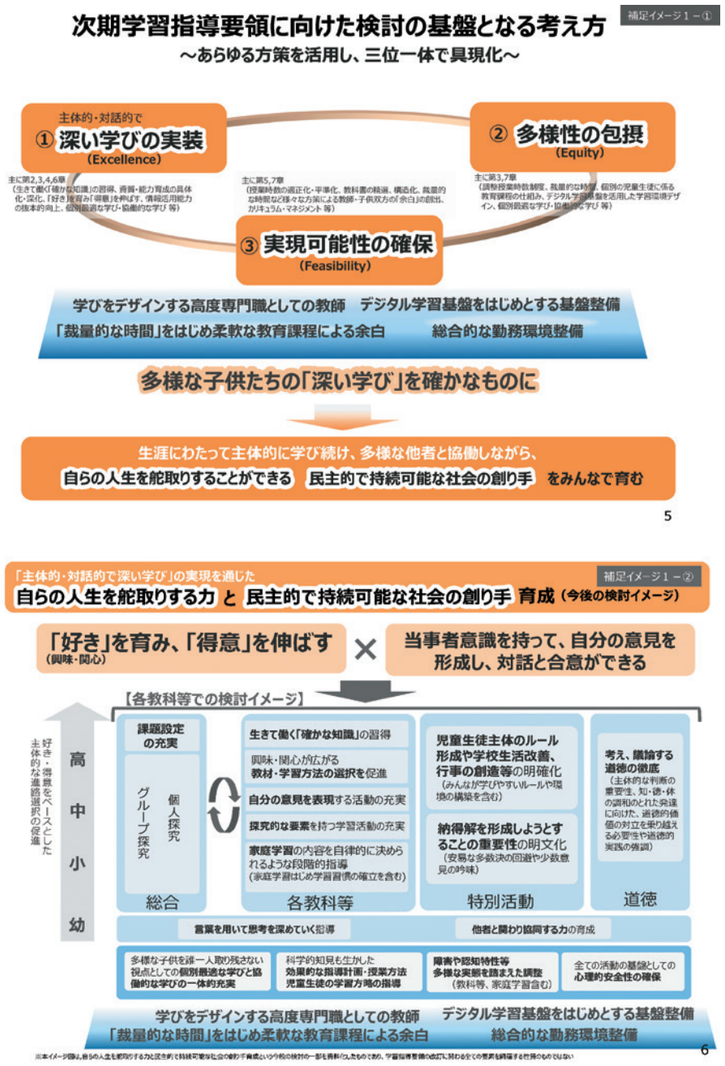
今回の改訂議論において最上位に掲げられたのは、『自らの人生を舵取りすることができる、民主的で持続可能な社会の創り手をみんなで育む』という目標です。私が参加する特別活動（特活）ワーキンググループでは、「探究」「道徳」「特活」の三つをバラバラにせず、互いに関連させながらこの目標を目指す方針が示されました。AIが知識を補完する社会だからこそ、この三つの領域が届ける「学びと経験の価値」が、学校の存在意義そのものになると信じているからです。しかし、現実は特活にも根深い課題が存在します。

1｜「活動を回すこと」からの脱却

これまで特活は、学級会や行事を滞りなく「こなす」こと自体が目的化してはいなかったでしょうか。効率を優先し、多数決で手っ取り早く決め、大人が用意した正解へ誘導する。そこにあるのは「運営」の時間であり、子どもたちが葛藤し、納得解を見出すための「学び」としての声掛けは、常に後回しにされてきたのが現実かもしれません。

2｜校則見直しの先にある「対話の文化」

カタリバの「みんなのルールメイキング」で出会った栃木県内のある高校の事例では、特活の形骸化を打ち破る一つの希望を示してくれました。生徒たちが自ら校則見直しに挑んだ際、ある生徒は、「校則が変わったことより、学校の中に話し合いができる雰囲気が生まれたことが何より嬉しい」と語りました。自分たちの環境を自分たちで整えていくプロセスで育まれたのは、単なる交渉術スキルではなく「自分たちの声には社会を動かす力がある」という確かな手応えでした。これこそが、特活が本来目指すべき「合意形成」の真の姿です。



中央教育審議会　『教育課程企画特別部会 論点整理 p.p5-6』令和7年9月

3｜「非認知能力」を磨く舞台として

中教審では現在、特活を「確かな民主主義の担い手を育む領域」として位置づけ直そうとしています。すべての活動の中核に「合意形成と意思決定」を据えるという大きな転換です。ここで重要になるのが「非認知能力」との関係です。自制心や協調性は、一人で机に向かっていても身につきません。バラバラな意見が衝突する「舞台」で、試行錯誤し、他者との折り合いをつける。この構造を教育課程に明確に位置づけることが、次期改訂の柱となります。

4｜AI時代だからこそ、学校は「非効率」な場所であれ

生成AIが効率的に回答を提示してくれる2030年。学校に残された最大の価値は、「あえて非効率な、思い通りにいかない対話」を保障することにあると私は考えます。SNSのフィルターバブルの中で、自分と似た意見の人とだけ繋がる時代だからこそ、学校は「選べない他者」と出会い、違いを認識しながら「共に生きる環境」を自分たちで決めていく公共圏であるべきです。効率化が進む今だからこそ、あえて「ぐちゃぐちゃな中にいられること」を特活を通じて保障する。これは、子どもたちにとって最強の生存戦略になると信じています。

5｜教師は「評価者」から「承認の伴走者」へ

最後に、先生方の役割について。これまでの「記録のための評価」は、先生方を疲弊させてきました。これからの特活に求められるのは、生徒が葛藤し、対話の一歩を踏み出した瞬間を見逃さない「形成的評価（声掛け）」です。「多数決に逃げず、相手の背景にある願いを聴こうとしたね」「粘り強く対話を続けられたね」。先生のこうした小さな承認が、生徒の中に「社会の担い手」としての自覚を生み出します。

2030年、日本の教室が、子どもたちが自らの意志で未来を決定していく「合意形成の舞台」となることを、私は心から願っています。

非認知能力を育む学校づくり

―三つの力を軸に「生徒が主役」の学校を目指す―

髙本 裕司（たかもと ひろし）
岡山県赤磐市立磐梨中学校
主幹教諭（学校プロジェクト統括リーダー）岡山理科大学理学部卒業後現職。

「非認知能力」は、変化の激しい時代を生き抜くために欠かせない力です。本校では、令和5年度の校長の着任を契機に「生徒が主役となる学校」を目指し、三つの力を軸にした取組を進めてきました。本稿では、その過程と実践を紹介します。

言葉の先行と、現場の戸惑い

新校長が着任し、「自主的・主体的に取り組める学校」という方向性が示されました。校内では探究学習やＰＢＬ（課題解決型学習）、非認知能力、教育ＤＸといった言葉が飛び交うようになりましたが、当初はそれらが日々の実践とどう結びつくのか、具体的なイメージを持てずにいました。

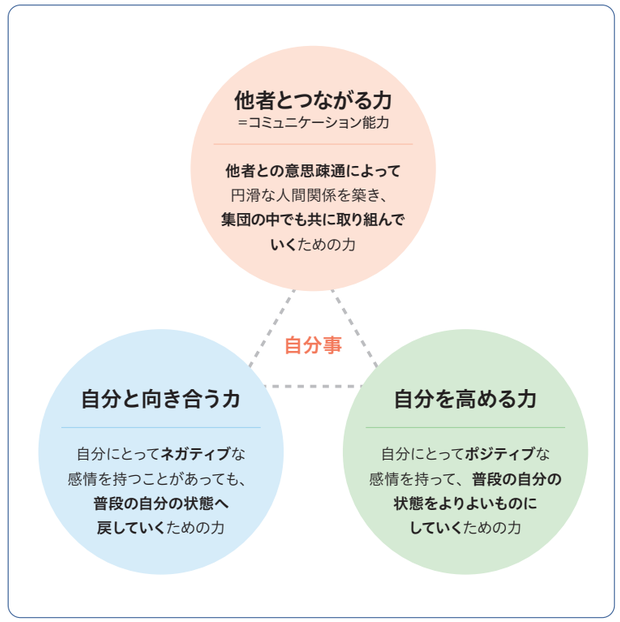
校長はトップダウンで答えを示すのではなく、「どう思いますか」「どうしたいですか」と問いを投げかけ、私たち自身が考えることを促しました。この姿勢が、学校全体で同じ方向を向こうとする機運を醸成していきました。

一本の映画が示した「目指す学校像」

意識を大きく変えたのは、校長とともに視聴した映画『Most Likely to Succeed』でした。知識を教え込むのではなく、生徒自身が問いを立て、試行錯誤しながら学びを深める姿は、これからの時代に求められる力そのものでした。この映画をきっかけに、非認知能力の育成とは特別なプログラムの導入ではなく、日々の教育活動の中で生徒にどのような経験をさせるかを問い直すことだという共通理解が、教職員の間で深まりました。

「三つの力」による非認知能力の構造化

本校では中山芳一氏の著書を参考に、非認知能力を三つの力として整理しました。



【詳細版】「3つの力」関係図はこちらから

一つ目は「自分を高める力」。意欲や向上心を持ち、楽しみながら挑戦する力です。二つ目は「自分と向き合う力」。得意・不得意を客観的に捉え、感情をコントロールして次の行動につなげる力です。三つ目は「他者とつながる力」。相手の思いを受け止め、協調しながら関わる力です。これらを学校生活のあらゆる場面で意識できる「ものさし」として位置付けました。この三つの力を軸に、行事や探究学習を通じた実践へと歩みを進めていきました。

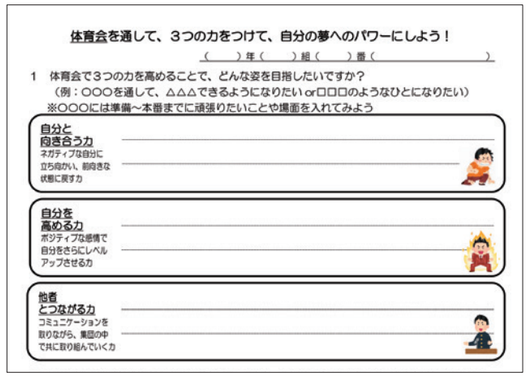
行事を通じた三つの力の育成

体育会は、非認知能力が最も可視化される場の一つです。令和5年度は準備段階から三つの力を意識し、練習から本番までに伸ばしたい力を生徒自身に記入させることで、行事を「自分事」へと転換させました。事後の振り返りでは互いの成長を付箋で共有し、保護者からも励ましの言葉を募りました。この仕掛けにより、生徒は自身の成長を実感し、学校全体で「見えにくい力」を価値付ける文化が生まれました。こうした取組は、合唱祭や探究学習にも波及しています。

付箋を貼った図（上：体育会、下：合唱コンクール）

探究学習の導入と主体性を支える工夫

令和5年度より「総合的な学習の時間」にＰＢＬを取り入れた探究学習を開始しました。当初は地域課題やＳＤＧｓをテーマにしましたが、課題設定に悩む生徒が多く、初期支援の重要性を実感しました。そこで令和6年度より講演会やカードゲームを導入して多面的な視点を養い、令和7年度は「自分の興味・関心をよりよい未来につなげよう」をテーマに設定。外部講師との連携で関心を掘り下げ、対話を通じて考えを言語化することを重視しました。目指すのは「自ら考え、語り、行動できる生徒」の姿です。正解のない問いに向き合い試行錯誤を重ねる探究学習は、三つの力を育む重要な基盤となっています。



体育会を通して、3つの力をつけて、自分の夢へのパワーにしよう！

（　　）年（　　）組（　　）番（　　）

1　体育会で3つの力を高めることで、どんな姿を目指したいですか？
（例：〇〇〇を通して、△△△できるようになりたい or □□□のようなひとになりたい）
※〇〇〇には準備～本番までに頑張りたいことや場面を入れてみよう

自分と向き合う力
ネガティブな自分に立ち向かい、前向きな状態に戻すか

自分を高める力
ポジティブな感情で自分をさらにレベルアップさせるか

他者とつながる力
コミュニケーションを取りながら、集団の中で共に取り組んでいくか

体育会生徒配付プリント（抜粋）

おわりに

「どのような生徒を育てたいか」を教職員が自分事として考え続けてきた過程そのものが、非認知能力の育成に繋がりました。「転ばぬ先の杖」を用意するのではなく、「転んでも立ち上がることのできる力」を育てたい。その思いを軸に学校生活を見つめ直す中で、三つの力が相互に作用し育つ姿が見えてきました。今後も生徒を信じ、教師自身が模索し続けることで、未来を切り拓く学校文化を築いていきたいと考えています。

教育論考 第3回

「非認知能力」と「青い鳥」

私の大好きな本の一冊に、メーテルリンク作の「青い鳥」があります。童話や絵本として、国や時代を超えて全世界で親しまれてきた不朽の名作です。チルチルとミチルという二人の兄妹は、幸せを象徴する「青い鳥」を求めて、深い森や思い出の国へと旅に出ました。この物語に込められたメッセージは、実は現代の教育政策が目指す理念とも深く重なり合っています。

現在、中央教育審議会初等中等教育分科会の教育課程企画特別部会において、次期学習指導要領の改訂に向けた審議が進められています。そこでは基本的な考え方として、「主体的・対話的で深い学びの実装」「多様性の包摂」とともに、学校現場での「実現可能性の確保」が方向性として掲げられ、これらを三位一体で具現化していくことが示されています。子どもたちが生涯にわたり学び続ける力を育むためには、育成を目指す資質・能力を明確にし、具体的な教育活動へとつなげていくことが重要です。そして、この目指すべき姿の原動力となるのが、非認知能力を含む「学びに向かう力、人間性等」にほかなりません。

非認知能力とは、数量的に把握できる認知能力（学力など）以外の総称であり、「自己を律する力」や「他者と協働する力」などを指す、極めて広範な意味を有する言葉です。こうした力は、子どもたちが自分自身に確かな「自信（自己肯定感）」をもてなければ、十分に発揮されません。情緒的な安心感という基盤があるからこそ、様々な場面で精一杯の力を出したり、他者と協働して学び続けようとしたりする意欲が育まれてくるのです。

私は長年、特別支援教育に携わる中で、子どもたちの自信や自己肯定感が育まれる瞬間に数多く立ち会ってきました。それは決して目立つ出来事や特別な行事の日ではなく、日々の学校生活の何気ない一コマの中にありました。例えば、下校前の荷物整理に時間を要し、帰りの会に間に合わなかった子が、整理の手順を教わりながら身に付け、余裕をもってみんなと同じように参加できるようになった場面がありました。その時の子どもは、実に自信に満ちあふれた表情をしていました。「みんなと一緒に帰りの会に参加したい」という強い意欲が、細かなスキルの習熟を後押しし、「やり遂げた」という達成感を生み出していたのです。

私たち教師にとって大切なのは、単に表面的な結果だけを見るのではなく、「できるようになった」あるいは「もう少しでできそう」という学習の過程を細かく把握し、子ども自身が成し遂げられるよう伴走的に支えることではないでしょうか。試行錯誤の過程を認め、価値付ける教師の関わりや言葉かけこそが、子どもたちの自己肯定感を育む心の支えとなります。

チルチルとミチルが探し求めた「青い鳥」は、夢のような世界ではなく、自分たちにとって最も身近な家、すなわち「日常の生活」の中に存在していました。「非認知能力」を育む営みも同様です。私たちが日々着実に行っている日常生活の中のきめ細やかな教育活動にこそ、子どもたちの生涯にわたる学びの原動力となる「青い鳥」が必ず存在している。私はそう確信しています。

丹野（たんの） 哲也（てつや）

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
情報・支援部　上席総括研究員（命）調整担当部長
前東京都立多摩桜の丘学園統括校長　元文部科学省初等中等教育局視学官

開隆堂のLINE公式アカウント　友だち募集中

英語　技術・家庭　図工・美術

教育eyeへの読者の声を募集します

ご回答はこちらから！

より良い誌面づくりのため、
皆さまのご意見をお聞かせください。

教育情報誌
教育eye Vol.3

非売品

2026年4月1日印刷　2026年4月6日発行　編集兼発行人　井口廣之
発行所　開隆堂出版株式会社　〒113-8608　東京都文京区向丘1-13-1
☎(03) 5684-6121（営業）、5684-6118（販売）、5684-6108（編集）　https://www.kairyudo.co.jp/

開隆堂出版株式会社
本社　〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎ 03-5684-6111

北海道支社　〒060-0042　北海道札幌市中央区大通西11-4-21 52山京ビル7階　☎ 011-231-0403
東北支社　〒983-0852　宮城県仙台市宮城野区榴岡3-10-7 サンライン第66ビル5階　☎ 022-742-1213
名古屋支社　〒461-0004　愛知県名古屋市東区葵1-15-18 オフィスサンナゴヤ9階　☎ 052-908-5190
大阪支社　〒550-0013　大阪府大阪市西区新町2-10-16　☎ 06-6531-5782
九州支社　〒810-0075　福岡県福岡市中央区港2-1-5 FYCビル3階　☎ 092-733-0174